

| | |
|-------------|---|
| Title | <批評・紹介>西漢社會經濟研究 陳嘯江著 |
| Author(s) | 宇都宮, 清吉 |
| Citation | 東洋史研究 (1936), 2(2): 155-159 |
| Issue Date | 1936-12-15 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/145581 |
| Right | |
| Type | Journal Article |
| Textversion | publisher |

る。この兩者は圖考と影集の如く「相輔而行」べきものであるから、沿革表の下に第十二章の參照頁を附しておかれたらと望蜀の感に堪へぬ。

第四章六朝城郭宮闕遺址に關しては本書一讀後、岡崎氏の「六代帝邑攷略」(桑原博士還曆記念東洋史論叢所收)を讀まれんことを希望する。殊に本書第二節の六朝水道考は岡崎氏論文中の諸水攷略に見ゆる如き深き史的理解にまで高められねばならない。

六朝陵墓については本書の著者には別に專著があり、本誌前號で水野君がその時「朱希祖(朱僕の父)が前篇で張璠の一誤にかぞへた棲霞山獅子衝宋文帝陵説をとり極力考證した陳文帝陵説を採用してない」(七八頁下段)ことを指摘したのであるが、圖考第六章の陵墓では家大人の注意もあつたのか陳文帝陵説に轉向してゐる。流石に專著まであるだけにこの章はすつきりしてゐる。

その他かき續ければ際限ないから打切る。本書の功名談は凡例中に列舉してあるからそれを參照してこの書の價值を認めること。兎も角この調子で史蹟の調査が進められて行くことは異邦に在つて支那の史地を研究する者の限りなき喜びでなければならぬ。(森 鹿 三)

西漢社會經濟研究

陳 嘯江著

中國社會史叢書(八) 民國二十五年三月新生命書局
出版四六判、定價一元

民國二十二年(一九三三年)伍啓元と言ふ人が「中國新文化運動概觀」を著して、その時までの支那に於ける新思潮新運動に對して一應の整理の試みをなして、其の中に「支那は今や西歐文化の直輸入、盲目的模倣の時は過ぎて東方文化の新たな提倡が始まつてゐる。東方文化の新たな提倡は未だ始まつたばかりでこれがやがて西歐文化論者の勢力に代つて勃興するか、それとも單なる廻光反照の類に過ぎないか今は判らないけれども、西洋文化の缺陷は東方文化の研究を待つて、始めて一層深く認識されることは間違ひないであらう。將來たとへ西洋文化論者が勝利を得ることありとも、思想的に見て、此の新提倡の東方文化論の影響は必ず受けざるを得ないであらうし、かくて始めて西洋文化に盲従すると言ふ病態がなくなるであらう。此の變化こそ甚だ重要なことである。現在の支那の一般人の心理的病弊は他人の模倣を欲しなと言ふことではなくして、盲滅法に他人の模倣を事と

するにある。今後の學術的思想家は全體先づ思索一番して模倣的態度を棄ることが出来るであらうか。」(二七四頁)と言つてゐる。まことに五四以來支那の西歐直輸入的な新文化運動は非常な勢で社會を風靡した。殊に最近の六七年來と言ふものは唯物的辯證論が猛烈に社會に浸染し、その方面の譯書は洪水の如く現れ、皮相的な公式主義が横行した。伍氏の上掲の批評は實に當を得たものと言ひ得る。かゝる空氣の中から起つて來たものが一種の批判的精神に出發する梁漱溟等の唱へる中國文化宣揚の所謂東方文化の新提倡である。これは正に支那自身に歸れと言ふ自省的運動と見ることが出来る。而して此の自省的傾向が學問界に於ては、生硬な公式的理論研究の域を蟬脱して着實な實證的研究となつて現れ、社會史經濟史の研究に於ける北京大學の陶希聖氏等を中心とする食貨誌一黨の實證的な態度の如きは我邦學界に對しても相當の貢獻があるのを認めなければならぬ有様である。かゝる支那の文化的傾向を専ら政治的方面からのみ解釋する人もある。私は政治的要因を輕視する者ではないけれども、かゝる見解には必ずしも全然的に賛するを得ない者である。それは寧ろ支那文化の如く古くして而

も洗練に洗練を重ねられた文化のみが持つ自負的心理と内省的性格に由來する所の文化的現象と見る可きであらう。中國自身の道を見出せと言ふ叫びを高く強く掲げた夫の民國二十四年一月の「文化建設」誌の卷頭を飾る「中國本位的文化建設宣言」は何よりも先づ斯る見地から解釋すべきものと確信するのである。とまれ最近に於ける支那の各種の現象から綜合して考へられることは、支那及び支那人が今や漸く自らを深く反省し、本來の自己を發見し、つけやきばにあらざる眞の自身の道を求めつゝあると言ふことである前置きは長くなつたが、此の陳嘯江と言ふ殆ど無名に近い一學徒の手になつた「西漢社會經濟研究」も實にかゝる雰圍氣の内から生れて來たものと考へる時、甚だ興味ある著述だと思ふのである。陳氏は早くより支那經濟史の研究に従事した歴史學の專攻者であり、(本書朱謙之序)「現代史學」誌「食貨」誌上には時々氏の論文が載つてゐる。現在は國立中山大學の文史學研究所に屬してその「月刊」誌上に於いても活動してゐるが、精しいことは私には判らない。

さて氏の此の書を通じて先づ第一に痛切に感得せられることは、前掲伍氏の排した盲目的な唯物史觀の公式的

見解を蟬脱せんとして全く獨自な社會形態の認識を打立てた所にある。元來秦漢以後二千年にわたる支那社會が如何なる形態に屬するものであるかと言ふことは近來最も力を注いで内外の諸學者の論ずる所であつた。伍氏の前掲書の下篇「社會史の論戰」なる一章にも具に諸説と其異同が表示されて居り、陳氏も本書の導論の内に一々それら諸説を略述して検討を行ひ、その缺陷を指摘し遂に次の様な結論に達した。秦漢以後清に至る支那社會は決して一部論者の説く如く封建形態に停滯し或は其の他の過渡的狀態に停止してゐたものではなく、支那社會は全く一種獨特な經路を経て發展して來たものであつて、それは西洋に於ける學者の未だ嘗て知らなかつたものである。かゝる社會形態を稱して「田傭社會」と言ふ。田傭社會とは封建制社會崩潰して一路資本主義社會へと發展した西歐社會に對立する全然別個の形態の社會であり、支那社會のあらゆる制度文化が西歐のそれと質を異にしてゐるのは全くそれが此の佃傭制の上に打たれた上層建築であるが爲めである。然らば佃傭制社會とは如何なるものであるかと言ふに、①農業生産の技術は機械發明以前の世界の何れの農業技術よりも高度に發

展してゐること。②支配關係は自由地主が佃農及び半佃農、雇農を支配し、その關係は封建制に於ける如く隸屬形態をとらず契約の形式をとり、③資本は前資本主義時代の如く手工品の生産に向つてよりも寧ろ常に土地に向つて投ぜられ、大土地所有による農產品は常に商品として利潤追求の目的を持つ、④富は地主の手に萃り、商人も必ず土地に投資して地主となる。此の爲めに地主は直接間接に政治法律其の他の制度を支配し諸々の觀念形態も亦これによつて規範せられてゐるのである。佃傭制社會は封建制社會の崩潰後二千年の長きにわたつて支那の社會形態をなしてゐたが、その間或は五胡亂華の時代或は元の時代等には異民族の侵入によつて時に退歩せざるを得ないこともあつた。而しながら非常に進歩した農業技術とそれに應ずる生産力の強大さは、それらの一時的打撃を常によく克復して再び佃傭社會を回復し得た。さればこれら一時的退歩の現象を以つて支那社會が進歩退歩の循環形態を示してゐるとなす、一部論者の説は不當で寧ろ支那社會は常に發展の經路をたどりつゝあつたと見る方がよく、佃傭社會は(1)秦漢より南朝に至る期を以つてその形成期となし、(2)北朝均田より唐末に至る時期

を佃傭制度の限制期とす可く、(3)宋より清に至つてその發達繁茂の時期となす可きである、本書が西漢社會經濟を専らその研究の對象としたのは西漢こそは二千年にわたる佃傭社會への一大轉換の時代であり、二千年の歴史を「動く」と言ふ方面から見れば西漢は正にその歴史の轉換の樞軸をなした時代であり、「動かない」と言ふ方面から見ると西漢は正に二千年來の支那社會史の一縮型である。と言ふ重要な時代相を持つてゐるからである。以上は主として本書の自序導論によつて陳氏の立場を極めて概略的に紹介したのであるが、これによつても判る様に陳氏は支那社會史の上に佃傭社會なる特殊の形態を認め、且つそれは絶対に歐洲に於ては認められない支那獨特の社會發展の形式であり、東西文化の相異の根元は實に此處に存してゐると解釋する。

元來西漢の時代を陳氏の様に支那社會の一大轉換期であり、又その一縮圖であると言ふ風に考へることは左程新奇なものではなく我が矢野仁一博士や小島祐馬博士の考へ方にもこれと相通するものが夙に存する。然し殊に此の點に力を注いでその理論的根據を求あやうとしたものは陳氏が始めてではないかと思ふ。以下陳氏は分章し

て論析すること十二、西漢並びに後代の諸史料を驅使すること巧妙を極め、加ふるに辯證法的唯物論を以つて指導的原理となし、西漢の所謂田傭社會なるものを究明せんと試みてゐる。

その態度は眞摯にして且つ緻密敘述は廣汎に涉り、論理は明析である。而し本書の所論に對する疑問の餘地の猶ほ多々あることは寧ろ當然であつて、史料の批判的使用等と言ふ點では随分考へねばならぬものもあるし、又日本學界の最近の注目す可き成果たとへば本書の税制を論じた部分に於いて加藤博士の財政及び算賦に關する研究、濱口氏の繇役制、更賦等に關する研究、宮崎市定氏の賦税制度に關する研究等が顧みられてゐない爲めに陷つてゐる謬論もあり、又書中示された多くの圖表中の記載には、當を失した見方が所々に表はれて居る。今一々それらに就いて列擧することは愚行に近いと思ふし、親切なる批判は自らそれ／＼別個の論文に於いてなさる可きであるから、私は今それ等に關して述べることを避けて度い。又氏が唯一の指導原理とする唯物史觀にしても、公式的援用の域をば脱せんと試みてはゐるけれども、猶ほ餘りに忠實であると言ふ非難を免れぬであらう。極め

て錯雜した社會史經濟史の全體を一個の法則的見解によつて律し去らうとする立場は餘りに自然科學的である。歴史を支配する偶然性の問題はもつと大きく考へらる可きものであり、又歴史が事實として我々に示してゐるものは常に自然的なるもの、社會的經濟的なるもの或は個性的精神的なるもの等の雜多に相關せる複雑なる様相である。それは常に定則的よりも寧ろ多分に偶然的であり、絶對的なるものゝ表現であるより寧ろ常に相對的なるものゝ表現である。それ故に歴史は形式的論理によつて把握せられるものではなくして直觀によつて把握せられ歷史的論理によつて理解さる可きものである。かゝる見方からすれば、陳氏の立てた個體社會なる概念も亦充分批判檢討の對象とならねばならぬであらう。而し要するに本書の持つ意味はそれか如何なる缺點があり、又如何なる立場にあるにしろ、從來の支那の社會史家經濟史家が陷つてゐた無反省な西歐的理論追隨の盲動的見解から脱して、全く一個の支那独自の社會形態を認識せんとした所であり、その努力の跡は充分認めらるのである。即ち本書は此の意味で支那に於ける社會經濟史研究史上に於ける一個の清算書であり、又將來に對する問題を展

開した所のものであると言ふことが出來やう。それ故に私は本書は將來の學者が支那の社會史經濟史の研究に當つては必ず一度は顧みて批判の對象としなければならぬもので十把一束して書庫の塵に埋らせて置くのには惜しい本であると思ふ。
(宇都宮清吉)

古閩地に關する研究三種

本年九月の禹貢半月刊(六卷三期)に葉國慶氏の「冶不
在今福州辨」と言ふ小論文が出てゐる。これは昨年十月
勞幹氏が國立中央研究院歷史語言研究所集刊(第五本第一
分)に「漢晉閩中建置考」を著はして、葉氏が嘗て燕京
學報(第五期)に發表した「古閩地考」に反對したのに對
する辯駁なのである。我が國では和田教授が本年六月の
本誌(第一卷第五號)上に於いて、市村博士の説を援用
し、「秦の閩中郡に就いて」なる論文を公にして葉氏の説
を非難されてゐる。これは勞氏とは獨立に發表されたも
のであるが、偶然にも葉、勞二氏の説を調停したかの様
にも見られるのである。

此處に問題となる治縣は別として、福建に明らかに郡
縣が置かれたのは後漢末からの事であるが、開發が非常